

IV-29

都市機能の重層段階的發展に関する研究

北海道大学大学院 学生員 今 尚之
北海道大学工学部 正 員 五十嵐日出夫

1. はじめに

都市は、時代と共に変化している。かつて人々が集い富み栄えた都市が、いまでは集う人もない石作りの巨大な建築物の残骸をさらしている例もあれば、数百万の人口をかかえ、世界の中心として繁栄している都市もある。

都市の歴史を振り返ると一つの都市が単純、永続的に發展を続けてきたのではなく、それぞれの時代の人々により求められた機能を満たした都市が時代を代表し、發展した傾向を持っていることが見受けられる。また、都市によっては、そこに住む人々の欲求を満たすように施設・設備を変化させ、さらには都市そのものの形、機能を変えることにより時代を越えて發展し続けている。

したがって、都市に求められる機能がどの様に変化、發展してきたかを考えることは、次の時代の都市の在り方を考える上で重要なことと思われる。

本研究は、巨視的な観点から、ヨーロッパの古代の都市から現代の都市までを対象として、都市に求められる機能の時代による変化・發展の傾向とその理由について考察するものである。

2. 都市の起源および發展

都市の起源および發展に関しては、歴史学、地理学の両分野から数多くの研究がなされている。歴史学分野では主に制度面からの研究が行われ、地理学分野では主に立地や形態、機能面からの研究がなされている。以下、これらの研究結果から、都市の起源および各時代区分毎の發展について概観する。

2-1. 都市の起源

都市の起源は、古代に求められている。古代において人々が都市生活を行うようになった理由につい

ては数多くの研究がなされている。現在、都市の起源には軍事起源説と宗教起源説の二つが提唱されている。

軍事起源説は、イエリング (A. v. Jhering) により唱えられた説で、外敵からの生命財産の共同防御を都市の起源とするものである。また、今井登志喜は⁽¹⁾、「古代東方の人民が最初一ヵ所に集住してむしろ農牧に不便な聚落に住むに至ったのは、少なくとも共同の防御が最も重要な原因をなしたと思われる」と外敵からの共同防御(軍事)が都市の起源であると述べている。

一方、宗教起源説は、ド・クーランジュ (de Coulanges F.) により唱えられた説である。クーランジュは、その著「古代都市」において、古代社会は、聖なるものを目標としその法則に従っていた。そのため、諸制度は信仰から派生し、死者への崇拜が家族を組織し、さらにそれが都市を創造するための重大な契機になったと規定している。

また、マンフォードは⁽²⁾、「人間はただ神を崇め、神に奉仕するために作られたという信仰を表している。都市は人間のみならず全宇宙とその神々をも表す新しい“象徴的世界”であった」と宗教的な起源についても言及している。

さて、五十嵐日出夫は「およそ神への信仰は、人間の精神あるいは肉体が、外敵の進入によって脅かされようとするときに発生し易い。神の力によって、この危険を脱し平安を得たいと願うからである。可視なるものと不可視なるものとを問わず、「生命の均衡ある發展」(五十嵐日出夫：目標設定論)を脅かそうとするものに対して、果敢に抵抗を試みる。すなわち可視の外敵に対しては、城壁をめぐるし武器を執ってこれに応じ、不可視の外敵、例えば不運や病気に対しては、呪術によってこれに立ち向かう」

と信仰が不可視の外敵に対する防衛行動であることを指摘⁽³⁾しており、宗教起源説も、外敵に対する防衛行動と同義といえよう。

さらに、木内信蔵は、都市の発生・発達を学ぶ前に集団の必要性、集団化の条件を明らかにする必要があるとして、集団化は、(1) 外敵からの防衛、(2) 政治・軍事・宗教・文化の権威を示すシンボルの建設、これらを行使する場所の提供に有利である⁽⁴⁾と説明している。

以上より都市の起源として唱えられている二つの説は一つにまとめることができ、人々は都市に防衛（宗教および軍事）の機能を強く求めたものと思われる。

2-2. 古代都市

都市の起源が人々の防衛（宗教および軍事）に対する欲求であるならば、実際の古代都市は防衛（宗教および軍事）を考えた都市作りをしているはずである。

2-2-1. アテナイ

アテナイは古代ギリシャを代表するポリスの一つである。紀元前5世紀にペルシア戦争に勝利しデロス同盟の結成と共にギリシャ第一の強国となり、ギリシャ文化の中心地となったが、紀元前4世紀にマケドニアに破れ衰退した歴史を持っている。

アテナイの古代遺跡に見られるアクロポリスの丘は古代ギリシャ都市の歴史的核をなす丘で、守護神の神殿が置かれ、非常時には要塞となったものである。ここには、アテナイの守護神であるアテナに捧げられたドリス式オーダーの荘重な建築物であるパルテノン神殿が建設されるなど、市民の精神的な統合のシンボル、すなわち聖域としての機能を持つ場所であった。アテナイではこのアクロポリスの丘の南麓に下町が形成された。ギリシャ古代都市の特徴であるアゴラ（公共広場）もここに設置され、軍事力と経済力とをもって、紀元前6世紀頃には周辺の小集落を結合する首都のポリスの形態を整えていた。アテナイは、海賊の進入を恐れて海岸から約10km程内陸に作られていた。このため、アテナイの南西約8kmにあるペイライエウスに外港を築造している。紀元前5世紀のテミクレトスの治世下においては、

外敵から交通路を確保するために市壁を延長し港湾を包み込み安全な港としている。

古代ギリシャでは植民都市が数多く作られている。植民都市の創建の手順は、まず、古式に従った神託占い（宗教）が行われ、次いで、泉水場の位置選定（給水）、外周を囲む市壁の建設（防衛）、格子状の大通りの割りつけが行われ、最後に細街路沿いの住宅が建設されたと記録されている⁽⁵⁾。

この記録やアテナイの例を見ても分かるように古代ギリシャでは、宗教および軍事すなわち防衛の機能が都市に要求されてといえる。

2-2-2. 古代ローマ都市⁽⁶⁾

古代ローマの都市は、周りを城壁で囲み、中央にフォーラム（公共広場）を置き、東西、南北に十字型の主軸道路を切り通し、門によって外部と連絡する構造であった。

都市の建設は、神官による儀式の後、城壁から建設が始められ、次いでフォーラムの建設が行われた。また、立地場所としては、洪水に備え、川から離れた小高い丘が選ばれることが多かった。また、フォーラムには神殿、演壇、会議場、裁判所が置かれ、公共広場の機能と聖域としての機能が結合していた。さらに、古代ローマ都市では、浴場、競技場など市民の娯楽施設も計画的に作られた。

このように、古代ローマ都市でも、宗教および軍事の防衛機能が重要視されていた。

2-3. 中世都市

中世ヨーロッパ都市の基本3要素は「市壁」「教会」「市場」といわれている。このなかの市場要素を重要視し中世都市全体が市場であったという指摘もなされている⁽⁷⁾。確かに、中世の都市の発展に商業が果たした役割は大きく、都市の求められた機能として商業的な機能があったことは確かであろう。しかし、それ以前に安全を確保する機能が重要視されたことは見落とせない。

今井登志喜は、中世末ヨーロッパで栄えた都市が商業的要地であったとしながらも、中世の都市が周囲に堅固な城壁をめぐらしたことにより都市がブルグ(-burg)と呼ばれたことから土地の要害が考慮されたと、安全の確保すなわち防衛機能が重要視さ

れたと指摘している⁽¹⁾。

また、アンリ・ピレンヌ⁽⁸⁾は、「商人達は、武装しないでは敢えて旅行に出なかったように、その集団居住地を様々な作り方の防塞地にした。」「従って、商人達に痛感された安全の必要が、城砦都市であるというあの中世の都市の本質的性格の説明を私達に与えてくれる。この時代に防壁の無い都市を想像することはできない。防壁は、中世都市に例外なく備わっている一つの権利、あるいは、当時の用語法を用いるならば、一つの特権である。」と中世の都市が、安全を確保する事を第一義として作られていることを指摘している。

さらに、中世においては、治安が悪く習俗一般も粗暴であり、人々の生活は常に防衛を考えたものであったことも指摘されている⁽⁹⁾。このような時代では、安全に対する機能が何よりも重要視されたといえよう。

2-3-1. ケルン⁽¹⁰⁾

ケルンはその起源をローマ時代に求める。785年以來大司教座の所在地となり以後、中世ドイツ最大の都市として栄えた。

ケルンには14の修道院が置かれ、中世ケルンの文化風土はこれらの修道院によって決定付けられていたという。

中世ケルンの都市形成の出発点となったのはローマ時代の城壁に囲まれた土地であった。この城壁内には何度も改築された大聖堂や二つの女子修道院などが建立された。修道院が集中したケルンであるが、12世紀前後には力を付けた商人により都市領主である大司教に対する反乱が起こされた。この反乱により1180年から1210年にかけて市の市壁が拡張され、安全な商業地域が確保された。この時市域から離れた修道院地区もこの市壁の中に取り込まれた。これは、修道院を砦とし市壁の総延長を長くしようとする軍事的な理由によるものと考えられる。

2-3-2. リューベック⁽¹⁰⁾

12世紀に東方植民の基点として建設され、13世紀末以來ハンザ同盟の首都として14世紀から15世紀に栄えたがハンザ同盟と共に衰退した。

リューベックは、ヴァーケニッツ川とトラーフエ川に挟まれ、トラーフエ川の河口から内陸側に18km

の位置に建設されている。これは、海上および陸上からの侵略に対する軍事的安全性の確保のためであった。さらに、バーケニッツ川には堰が作られ防御のための幅広い堀割りも作られた。また、市庁舎、マルクト（市場広場）、都市教会堂である聖母マリア聖堂は市の中央部の丘に位置し、この丘の緩い斜面の下に船付き場が設けられていた。

2-3-3. フィレンツェ⁽¹⁰⁾

フィレンツェの起源もローマ時代に求められる。13世紀から毛織物・絹織物工業・金融業で栄えた。また15世紀からメディチ家の支配が成立し、イタリアルネサンスの中心地となった。

フィレンツェでは、ローマ時代から14世紀前半までに6周の市壁が作られている。第一の市壁はローマ時代に建設された方形囲壁である。その後14世紀前半までに5周の市壁が作られている。これら6周の市壁のなかで、1284年から約半世紀にわたり、最外周に建設された市壁は、全長8.5km、塔73、市門15を備えていた。また、市壁自体の厚さは2.1m、堀は20mの規模を持ち、内外の環状道路を合わせてその幅は約41mであったという。この市壁は、同時代人から賞賛され、フィレンツェの市民の誇りであったという。また、最外周の市壁の建設と並行して、新しい大聖堂、市庁舎が建設された。大聖堂と市庁舎は都市軸を挟んで対象の位置に建設されている。これは、司教と市長の対立というより、宗教的権威と世俗的権威の双立・共存と見られる。

以上中世ヨーロッパの各都市の構造を概観したが、市民は、防衛施設である市壁、精神的な統合のシンボルでもある教会堂の建設、政治中心の市庁舎の建設に重きを置いていたといえる。これは、「市民は世俗的権威とそれを越えた精神的権威とによって守られる事を望み、都市は、快適、堅固、神聖であるために、市政の安寧を司る庁舎、無敵の囲壁、信仰を統括する教会堂を必要とした」⁽¹⁰⁾すなわち、防衛（宗教および軍事）機能を都市に求めたことの現れでもあろう。

2-4. 近世都市

近世になってからは、都市は必ずしも繁栄の時期にあったのではなく、沈滞していたとする指摘が増

田四郎によってなされている⁽¹¹⁾。この時代は、政治史的には絶対王政、経済史的には重商主義の時代に該当し、国家権力が次第に強くなり、都市の自治権が奪われた時代である。このため、この時期に発達した都市は、国家的な意味合いを持つ都市であり、政治の中心としての首都の発達に目覚ましいものがあった。今井登志喜は16世紀から18世紀までを「首府都市の時代」と名付けている⁽¹⁾。言い換えれば、都市に政治的な機能が強く求められた時代であるといえる。

さて、パリはこの時代を最も代表する都市として有名である。今井登志喜は、パリをフランスの王権の伸長と共に発達した最も国家的な都市⁽¹⁾としている。セヌ川の中州のシテ島を中心にして発生したパリは、11世紀から13世紀末にかけて都市成長をしたが、ペストの流行により人口は減少し、歴代の国王はパリを逃れて郊外の田園の所領地に居城を構えるなど、17世紀のルイ14世時代まで凋落の傾向をたどっていた。ルイ14世はルーブル宮殿の建設を進めたが、単なる居城としてではなく、自己の手中に握られた国家権力を目にみえる形で表現する記念建築として意識していた。その後、コンコルド広場を含めた壮大な都市軸の建設が進められ、さらには都市施設の頂点を成すものとして凱旋門が建設された。

このようにパリは、ブルボン王家以来非常に強大となったフランス王権を背景とし、政治都市として発展した。

このほかにも、ウィーン、ベルリンなど国家の首都として発展した都市があるが、いずれにも王権を誇示するような壮麗な宮殿などが建設された。

2-5. 近・現代都市⁽⁴⁾⁽¹⁰⁾⁽¹²⁾

近代に入ってから、産業革命によって誕生した工業都市に見られるような産業都市が、国家の中心すなわち政治中心としての首都と並ぶ程の飛躍的な発展を見た。この背景には資本家の資金・資材と労働力の獲得が存在している⁽¹¹⁾。

ロンドンはもとは二つの都市であった。一つはローマ時代に起源を求める商業中心地としてのロンドン市であり、もう一つは10世紀に起源を求める政治権力の座としてのウェストミンスターである。イギリスの発展と共に二つの都市は人口増加と両都市の

間に設けられた法機関により一つの都市となった。したがって、近代のロンドンには政治の中心と同時に経済の中心でもあった。このため、商業的な背景を持たなかったパリを凌ぎ、19世紀に入ってから世界最大の都市の一つとして飛躍的な発展を遂げた。

近代から現代において発展した都市は、経済活動と密接に関係しており、都市に求められている機能は経済であるといえよう。

3. 都市に求められる機能の重層段階的發展過程

3-1. 都市に求められる機能の段階的変化

2章では、古代から各時代を代表するヨーロッパの都市に求められた機能を概観した。

この結果より、第1図に示すように時代を代表する都市機能があり、それは時代とともに段階的に変化しているといえる。

<時 代>		<都市機能>	
近・現代	・・・	経	済
↑		↑	
近 世	・・・	政	治
↑		↑	
中 世	・・・	防衛（宗教・軍事）	
↑		↑	
古 代	・・・	防衛（宗教・軍事）	

第1図 都市に求められる機能の段階的変化

このように、時代を代表する都市機能があることについては、矢守一彦によっても指摘⁽¹³⁾されている。矢守は「こころみに現代都市のあれこれを念頭に浮かべてみると、住宅都市あり、観光都市ありで機能による都市分類は高校地理の教科書なみにひろがる。しかし巨視的に見れば、それぞれの時代には、それぞれの時代を代表する都市機能があったといえるのではないか。」と、都市に求められる機能が時代により異なること指摘し、さらに、古代都市は政治機能が時代を代表し、中世・近世では領主の城館および商業都市としての機能が時代を代表する。そして、近代から現代に至るまでは工業都市としての機能が時代を代表していると述べている。

したがって、矢守により指摘された、時代を代表する都市機能からみた都市の変遷過程は、政治都市→領主城館都市および商業都市→工業都市となる。

しかしながら、都市の起源が防衛を第一義にしていること。古代・中世都市の作りが防衛を重要視していること。近世に入り、政治機能が優位にある首都が大きく発展したこと。近代では、経済機能が卓越している都市が世界的に発展したことなどを考えると、都市に求められる機能からみた都市の変遷過程は第1図に示した方向性を持つものと考えられるが自然であると思われる。

3-2. 都市に求められる機能の重層段階的發展

また、都市に求められる機能は単純に段階的だけではなく重層的な発展もしている。時代が古代・中世から近世に移り、都市に求められる機能が防衛（宗教・軍事）機能から政治機能へと段階的に移り変わったとしても、防衛（宗教・軍事）機能がまったく顧みられない訳ではない。政治機能が求められる時代であっても防衛機能（宗教・軍事）機能は必要であり、それらの機能を持った施設・設備は用意されることとなる。

ただし、例えば、市壁が取り払われ、環状道路が建設された例のように、以前求められた機能を果たすために準備された施設・設備が、現在求められている機能を果たすために不都合となれば、その他のものにも変わるようになる。

4. 都市に求められる機能の重層段階的發展機構

以上の章では、都市に求められる機能が時代とともに重層段階的に発展することを見てきた。

このように都市に求められた機能が時代とともに変化・発展する原因としては、都市が人間によって作られるところから、人間の欲求変化が背景に存在するものと考えられる。

人間の欲求が都市への人口集中の原因となっていくことの指摘は、E. A. ガトキンドによってなされている。ガトキンドによると、人間は、①群居本能、②社会的諸活動への積極的参加、③自由の獲得、④豊かな生活の実現などの要求（欲求）を満たすために都市に集まり、それが都市への人口集中をもたらしたと説明している⁽¹⁴⁾。

また、例えば、中世ヨーロッパのリュールベックはハンザ貿易の中心都市として知られているが、そのため、貿易に必要な施設が優先的に作られている。一方、古代ローマでは、民衆の歓心を買う必要から浴場や競技場などの娯楽施設が数多く作られている。この二つの都市の比較からも、都市の機能は人間の欲求を満たすように作られてきたことが分かる。

以上の例から分かるように、都市に求められる機能は人間の欲求が根底にあり、人間の欲求が時代によって変化することによって都市に求められる機能に変化するといえる。したがって、人間の欲求が重層段階的に変化することが、都市に求められる機能の重層段階的に発展する原因といえよう。

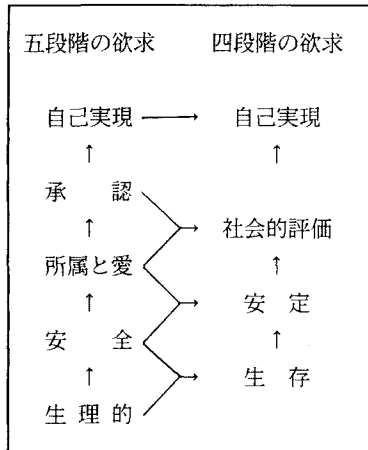
人間の欲求が段階的に変化することの指摘は、A・H・マズローによってなされている。（マズローの欲求五段階説⁽¹⁵⁾⁽¹⁶⁾）

マズローは、人間は、人類に普遍で、明らかに不変で、発生的あるいは本能的な起源を持つ無数の欲求によって動機づけられている。という観点から人間の行動を説明している。

さて、マズローによると、人間の基本的欲求には、①生理的欲求、②安全の欲求、③ 所属と愛の欲求、④承認の欲求、⑤自己実現の欲求の五段階があり、人間の欲求は、一番低次の生理的欲求が満たされると、次に、再び新しくさらに高次の欲求（例えば安全の欲求）が現れ、同様なことが続き欲求水準は高度化される。すなわち、人間の基本的欲求は相対的に優位な順に一つの階層を作っていると説明するものでもある。

このマズローの五段階の欲求であるが、①生理的欲求と②安全の欲求は、人間が生存するために欠くことのできないものに対する欲求であり、(1)生存の欲求と言い換えることができよう。また、②安全の欲求の一部には安定に対する欲求も含まれていると考えられる。そして、③所属と愛の欲求もまた安定に対する欲求を含んでいるとも考えられる。これより二つの欲求を合わせて、(2)安定に対する欲求といえよう。この場合の安定にはいくつかの意味を含むことになるが、政治的ないし経済的な安定が大きな意味を持つものと考えられる。さらに、③所属と愛の欲求と④承認の欲求は、社会的な評価に対する欲求と考えることができ、この二つを合わせて、

(3) 社会的評価への欲求ということもできよう。以上より五段階の欲求は第2図のように四段階にまとめることができる⁽¹⁷⁾。



第2図 欲求の段階

このように、人々の欲求は、生存 → 安定（政治的・経済的） → 社会的評価 → 自己実現の方向へ段階的に変化し、その変化の方向は、都市の重層段階的發展方向である、防衛 → 政治 → 経済の流れとアナロジカルに一致している。このことから都市に求められる機能は、人々の欲求により、重層段階的に發展する傾向を示すものと考えられる。

5. まとめ

本研究では、歴史学、地理学における都市史の研究結果から、都市に求められる機能が時代により変化してきたこと、およびその変化が重層段階的な發展傾向を示すことを指摘した。

さらに、都市発生の背景には人間の欲求が働くこと、人間の欲求が段階的な変化をし、このことが都市に求められる機能の重層段階的な發展原因となっていることを指摘した。

現在、人々の欲求は自己実現の段階に向かっているといわれている。自己実現とは、「高度に象徴的な表現手段を使った自己表現⁽¹⁷⁾」であり、言い換えれば、文化的な側面が重視される段階といえよう。

このように人々の欲求が自己実現の段階へ進むならば、都市に求められる機能もまた、経済的な機能から文化的な機能を満たすものとなることがいえ、

これからは自己実現が可能な機能を持った都市に人々が多く集中するものと思われる。

< 参 考 文 献 >

- (1) 都市發達史研究 今井登志喜 東京大学出版会 1951
- (2) 歴史の都市、明日の都市 L. マンフォード / 生田勉訳 新潮社
- (3) 土木計画学と土木史 五十嵐日出夫 近代土木技術の黎明期 土木学会日本土木史委員会 1983
- (4) 都市地理学原理 木内信蔵 古今書院 1979
- (5) 古代ギリシアとローマの都市ー古典古代の都市計画ー J・B・ワード＝パーキンズ / 北原理雄訳 井上書院 1984
- (6) 都市ーローマ人はどのように都市を作ったのかー デビット・マーコレー / 西川幸治訳 岩波書店 1980
- (7) 中世都市 ハワード・サールマン / 福川裕一訳 井上書院 1983
- (8) 中世都市ー社会経済史的試論ー アンリ・ピレンヌ / 佐々木克己訳 創文社
- (9) 生活の世界歴史6 中世の森の中で 堀米庸三編 河出書房新社 1991
- (10) 西洋の都市ーその歴史と類型ー ヴォルフガング・ブラウンフェルス / 日高健一郎訳 丸善 1986
- (11) 都市 増田四郎 筑摩書房 1978
- (12) もう一つのイギリス史 小池滋 中央公論社 1991
- (13) 都市図の歴史ー世界編ー 矢守一彦 講談社
- (14) 都市ー文明史からの未来像ー E. A. ガトキンド 日笠端監訳 日本評論社
- (15) 人間性の心理学 A・H・マズロー 小口忠彦監訳 産業能率大学出版部 1971
- (16) マズローの心理学 フランク・ゴープル 小口忠彦監訳 産業能率大学出版部 1972
- (17) 産業社会の変貌 佐伯啓思 国民生活指標（平成3年版） 経済企画庁国民生活局 1991